



アリスギアマガジン 読者参加型シナリオ



霞ヶ浦のサンセット

—アリス・ギア・アイギス外伝—

第十話 「新生」

《希望、かな?》を選択

◆筑波学園大学付属筑波研究学園高校 部室棟

漣音 「それでは、第……何回だっけ？ と、とにかく部会を始めます」

優陽は筑波の高校に進学することを決め、それに漣音と調も続いた。全寮の高校ではあるが、学校側の配慮もあり、部屋も同室となった三人は、『映画研究部』の新設を生徒会に提案していた。

調 「部会って言うってもなあ。まだ部として認められてないし」

漣音 「じゃあ、なんて言えばいいのよ？ サークル会？」

優陽 「さすがにサークル会じゃ、締まらないよね」

調 「だな」

優陽 「部として正式に認められるためには、最低五人が必要なんだっけ？

あと二人、なんとか部員を増やさないと」

漣音 「そのための部会なんだから、ちゃんと考えてよ、二人とも！」

広さは教室の四分の一程度。

その部屋を三人で独占している状態だった。

調

「考えろって言ってもなあ。上級生は今更新設されたサークルなんかに入らないだろうし、狙うとすれば私達と同じ一年生か、来年に期待して新人生になるんじゃないか？」

優陽

「一年生も厳しいよねー。アクトレス活動をメインに考えている娘達がほとんどだし」

漣音

「そもそもこの学校を志望する段階で、アクトレス活動したいから来るんだもんね……」

調

「おいおい。部長がそれじゃあ、先が思いやられるな」

漣音

「どうせ、ここは部じゃないんでしょ？ 呼ぶならサークル長じゃないの、しべ？」

漣音は先ほどの仕返しとばかりに、調の突っこみを皮肉で返した。

調 「悪かったよ。すねるなって、漣音」

これ以上いじけられても困ると、さすがの調も返す言葉がなかった。
そこに、三人をこの高校に導いた女性がやって来た。

進藤 「調子はどう？」

優陽 「あ、進藤さん！」

調 「部員集めに苦戦しているところですよ」

漣音 「せっかく便宜を図ってもらい、部室まで与えてもらったのにすみません」

進藤は、三人に映画を作って欲しいとお願いしていた。

それはある意味、口説き文句でもあり、言葉のあやでもあったのだが、
律儀にそれを実行しようとしてくれている三人を愛おしく感じていた。

進藤

「ううん。三人以上いれば、サークルでも準部活動として認められるから。ただ、キチンとした予算が出るのは五人以上。早く集まれば良いわね」

進藤は推薦入学の話をしていた時よりも、フランクに話した。

学園生となった三人はもはや身内でもあるので、以前のような他人行儀さはない。

優陽

「はい、頑張ります！　って言いたい所ですが、本格的な映画作りができるのは、来年になってしまうかも……」

進藤

「ふふ、それでもいいわ。でも、必ず映画、完成させてね」

優陽

「大丈夫です！　みちるちゃんもこの学校に来たいって言ってたし、いつか絶対に揃いますから！」

滯音

「せめて、カメラだけでもあればなあ」

調

「それまで脚本を練り込むんだろ？　カメラがなくてもやれることはあ

るさ」

そんな話をしていると、スピーカーを通して校内放送が流れた。

校内放送 「出動要請のお知らせです。稲葉優陽さん、草野滯音さん、櫻井調さん。

校内におりましたら、ブリーフィングルームへお越し下さい」

優陽 「あ、出動要請だ！ やった！」

滯音 「ようやく出番が回ってきたわね」

調 「ああ。待ちかねたよ」

進藤 「ふふ、あまり気負わずに頑張ってらっしゃい」

三人 「はいっ！」

進藤の励ましに答えて、三人は部室を飛び出した。

◆筑波学園大学付属筑波研究学園高校 ブリーフィングルーム

ブリーフィングルームの扉を開けると、中に一人の女性が待っていた。

優陽 「失礼します！ 稲葉優陽です！」

漣音 「草野漣音です！」

調 「櫻井調です！」

斎藤 「こんにちは、稲葉さん、草野さん、櫻井さん」

優陽 「あ、斎藤さんだ！」

斎藤 「ふい、今日から正式に三人の担当になったわ。よろしくね」

斎藤を名乗る女性は、教員免許を持っている教師とは異なり、工学博士号を持つ若き技術者だった。

そのため正式な所属は研究機関であり、現在は学園に出向している身でもあった。

三人が通う学校のアクトレス達にはそれぞれ担当者が付く。

斎藤は優陽が使っていたテストギアのチューニングを担当していたが、今回から正式に三人の担当となった。

三人はブリーフィングルームに入ると、用意されていたソファに座った。

斎藤 「みなさんには、本日から定期的に宙域調査を行って頂こうと思っています」

優陽 「ううつ、いよいよかあ！」

漣音 「正式なアクトレスとしての第一歩だね、優陽！」

優陽 「うん！ 諦めずに頑張ってきて良かったよ！」

調 「まさか、入学して半年でエミッション値がこうも伸びるとは、私も驚いたよ」

エミッション値には個人差がある。

ピークの年齢も異なれば、成長度合いも違う。

澤音 「これでテスト生としてはお役御免だね」

優陽 「うー、それが申し訳なくて……本来、テスト生として入学したわけだし……」

斎藤 「ううん。半年間だけだったけど、とても良いデータがとれたから、ギアを改良して次のテスト生に引き継ぐことができるわ。だから、今日からは正式なアクトレスとして、思いっきり暴れてきなさい！」

優陽 「……はいっ！」

優陽はガッツポーズで応えた。

優陽の両隣にいる親友達は、ようやくこの日が来たと感無量だった。

斎藤 「それじゃあ、宙域調査について説明するけど、いいかしら？」

三人 「はい！」

斎藤が手元にあるスイッチを押すと、ブリーフィングルームの照明が

消えて、ホログラムによる宙域の画像が部屋全体に表示された。

この辺りはさすがに設備の整った学校だと、三人は素直に感動していた。

斎藤

「貴方たちが担当するのはスバル宙域という、比較的新しい宙域です。

調査し尽くされた宙域とは違って、不測の事態が発生する可能性もゼロではありません。その時はこちらの指示に従ってください」

三人

「はい！」

斎藤

「とはいえ、ギアには安全装置もありますし、大きな危険はないと思うので、気楽に調査に励んで下さい」

三人

「はい！」

三人はやる気持ちを抑えるように、ハッキリと返事した。

斎藤

「あと稲葉さん」

優陽

「はい！」

斎藤 「この半年間で習得したデータを元に、専用のギアを調達しました」

優陽 「えっ……?」

斎藤 「テスト生として頑張ってきた特権よ。胸を張って使いこなしてね!」

優陽 「は、はいっ!」

思わず、手を上げて返事をしてしまう優陽。
それほど嬉しさが溢れかえっていた。

漣音 「あー! 優陽に先越されたー!」

調 「良かったな、優陽」

漣音 「おめでとう、優陽」

優陽 「あ、ありがとう、しべちゃん、漣音ちゃん……」

優陽は今更ながら、親友二人の存在を誇りに思えた。
二人がいたからこそ、こうしてアクトレスとしての活動ができるよう

になった。

もちろん二人にとっても、学力レベルの高い大学付属の高校に入学できたことに違いないし、願ってもないことでもあった。

三人が三人とも充実していた。

斎藤

「それじゃあ、頑張って行ってらっしゃい！」

三人

「はい！」

三人は立ち上がって、アクトレスのスーツに着替えるためにドレスルームへ向かった。

◆スバル宙域

三人が宙域調査を始めると、程なくしてヴァイスの集団と遭遇した。

調

「滯音、右！」

滯音

「任せてっ！」

調が一步下がって状況を俯瞰し、その指示に従って滯音がシューティングした。

滯音

「く……っ！」

三体いたヴァイスのうち、二体を撃墜するが……

滯音

「しべ！ 一体、そっちいった！」

調

「大丈夫だ」

調は余裕綽々といった風格で、得意の槍を一閃した。

滯音 「さすがしべ。優陽は……?」

調 「ああ。問題なさそうだよ」

ヴァイスの群れに突撃していた優陽が、二人の側に戻って来た。

優陽 「いえーい！ 六体撃破してきたよ！」

滯音 「六体!? アクトレスになったからって無茶すぎよ、優陽！」

優陽 「このギア、ものすごく使いやすいんだよ！ ビックリするほど体に馴染むんだよね！ 思った通りの動きができるし、なにより考えてからのラグがほとんどないんだよ！」

調 「さすがは専用ギアってところか」

滯音 「うー、わたしも早く欲しい」

優陽の専用ギアの話で盛り上がっていると、調の表情が一瞬にして厳しいものになった。

調 「……っ！ 油断するな……あそこだ！」

漚音 「大型ヴァイス！」

調と漚音に緊張が走る中、優陽だけがキリッと笑顔を浮かべ、

優陽 「うゝ、武者震いゝ。しべちゃん、指示よろしく！」

大型ヴァイスに向かって行った。

調 「おいっ！ あんまり調子になるな、優陽！ 漚音、優陽のフォロー頼む！」

漚音 「分かったわ！ 優陽っ！ 待って！」

二人が大型ヴァイスに向かう中、調はヴァイスの動きをじっと見つめた。

調

「……さてと、分析から開始するか！」

素早く敵の弱点を見定め、そして二人の後を追いつながら、

調

「優陽！ ライフルで敵の動きを止めてから剣でアタックだ！ 滯音は遠距離で頭部を狙え！」

的確な指示を与えた。

大型ヴァイスを撃破するのは時間の問題だった。

◆ブリーフィングルーム

優陽が正式なアクトレスになってから数ヶ月後。

斎藤 「お帰りなさい。今日も大活躍だったわね」

斎藤に出迎えられた三人は、一仕事終えた充実感に満ちていた。

優陽 「ただいまー！ 調整してもらったスコープ、ターゲットとのズレも解

消して、とてもエイムしやすくなりしました！」

手を上げながら斎藤に応える優陽。

この上ない満面の笑みを浮かべていた。

斎藤 「ふふ。エンジニアに伝えておくわ」

斎藤も想定以上の結果が出たことで、こちらも満足げだった。ただ、続く斎藤の話に、三人は驚きを隠せなくなる。

斎藤 「それとね、つい先ほどなんだけど、茨城シャード放送局から連絡が来

てね、三人にアクトレス番組に出て欲しいって」

三人 「ええっ!？」

澤音 「わたし達に、ですか？」

調 「なるほど。アクトレスとして活躍すると、こういうことになるのか」

優陽 「はいはい、出ます！ やったー!」

斎藤 「ふふっ」

三者三様の反応に、斎藤は吹き出しそうになる。

澤音 「もう。遠足に行くんじゃないんだよ、優陽」

優陽 「違うよ！ 部員勧誘のチャンスだよ、澤音ちゃん!」

澤音 「えっ!？ まさか、テレビで部員の勧誘をするつもり!？」

調 「はは、優陽らしいな」

澤音 「笑い事じゃないよ、しべ……」

調までが優陽に同意するとは思わなかったため、一人だけガックリと肩を落とす漣音。

漣音はせっかくのテレビ出演がカオスになることを恐れていた。

斎藤

「それじゃあ、三人とも出演オッケーって先方に返事していいかしら？」

優陽

「はいっ！」

調

「大丈夫です」

漣音

「……はい、頑張ります」

斎藤

「それじゃあ、後日、また連絡するわね」

斎藤はスマホを取り出し、先方へOKの意志を示すメールを作成していた。

◆水戸 茨城シャード放送局

司会 「さあ『シャイン・ザ・アクトレス』のお時間がやって参りました！」

少しテンションの高い女性司会者による番組開始の合図とともに、テーマ曲がスタジオ内に流れた。
そしてカメラはグーツと退き、三人がフレームインする。

司会 「今日のゲストは……こちら！ 筑波学園大学付属筑波研究学園高校の

稲葉優陽さん、草野滯音さん、そして櫻井調さんです！」

優陽 「よろしくお願いします〜！」

滯音 「よ、よろしくお願いします……」

調 「よろしくお願いします」

ワクワクが止まらない優陽、緊張した表情の滯音、淡々としている調。

見事にそれぞれの性格が表れていた。

司会

「はいっ！ それでは早速ですがこちらを見て頂きましょう！」

司会が手を前に伸ばすジェスチャーを加えると、スタジオ内の映像から、三人がヴァイスと戦闘する動画に切り替わった。

その動画をスタジオ内のモニターで確認しながら、司会者と三人の対談が始まった。

司会

「稲葉さんの積極的なアタッキング、草野さんの正確なシューティング、そして全体を俯瞰する櫻井さんの的確な指揮！ 見事な役割分担ですね」

調

「はい。気をつけていないと優陽が暴走してしまうので、抑えるのが大変なんです」

優陽

「あ！ しべちゃん、今、酷いこと言った！」

優陽が調に向かって言葉を発する場面が、一瞬だけスタジオに切り替わり、カメラに抜かれていた。

再び画面が動画に切り替わる。

司会 「でも、稲葉さんの勇姿は見事ですな〜」

優陽 「そうですね、えへへ……」

司会 「それをさりげなくフォロー射撃する草野さんの仕事人振りも見逃せません」

漣音 「えっ！ そ、そうですね!? あ、ありがとうございます」

司会 「そして、一歩退いたところで指示する櫻井さんの司令塔っぷりも噂通りですね!」

調 「昔からずっとこんな感じてしたので、特別なことをしているつもりはありません」

優陽 「おお〜」

漣音 「へえ〜」

調の堂々とした答えっぷりに感心する優陽と滯音。

この場面も一瞬カメラに抜かれていたことを、三人は気づいていない。

滯音

「でも、こうして見直すと、優陽のフォローをするわたしの大変さが分かるでしょ？」

動画をみながら、ここぞとばかりに滯音が普段の苦勞を訴えた。

優陽

「ううつ、ごめんね、滯音ちゃん……」

滯音

「分かればよろしい、分かれば」

優陽

「プッ。あはは」

どうやら滯音の溜飲が下がったようだ。

そんな滯音の表情を見て、優陽は吹いてしまう。

司会 「仲がよくて微笑ましいですね。プライベートでも、そしてヴァイスと

対峙しているときも、息がピッタリです!」

動画から、再びスタジオに映像が切り替わる。

司会 「それで、今はアクトレスの傍ら、映画作りをしているんですって?」

司会者が、手元の資料を見ながら、三人に話を振った。

調 「はいっ! 学校で映画研究部を作りました! 今はまだ正式な部には

なっていないんですが」

優陽 「あの、ちょっと宣伝しても良いですか!?!」

司会 「宣伝ですか? どうぞどうぞ」

司会者からすれば、進行を外れるちょっとしたハプニングではあるの

だが、よくあることなのか笑顔で了承した。

稲葉

「漣音ちゃん！」

漣音

「ほ、本当に出すの!？」

調

「もう、優陽が言ってしまったんだ。今更引き返せない」

優陽と調の圧が強い。

少し逡巡した後、観念した漣音は思い切って椅子の後ろに用意していたフリップを掲げた。

漣音

「……ええいつ！」

稲葉

「只今、筑波研究学園高校の映画研究部では部員を募集してまーす！

あたし達と一緒に映画をつくりませんか!? 在校生はもちろん、ウチの高校を目指している未来の後輩も大歓迎です！」

調

「とりあえず、在校生の方、是非！」



滯音 「ぜ、是非」

三人は合わせて手を振った。

司会 「というところらしいので、是非みなさん、映画研究部に入ってくださいね！」

ノリの良い司会者も、三人に合わせるように手を振った。

優陽 「あはは、ありがとうございます」

司会 「それでですね、ここからはサプライズなのですが」

三人 「えっ!？」

今度は司会者が、台本にないことを話し出した。

司会 「今、映画研究部に入ってみようかなと思ったアナタ！ 背中、押しま
すよ！」

漣音 「え、なに!？」

司会 「実は……みなさんが中学生の時に作った映画を入手しました！ 今、
ここで流してみようかと思えます！」

三人 「ええーっ!？」

まるで初恋の人でも登場してきたような驚き具合に、司会者はドヤ顔
を浮かべた。

優陽 「まさか、『霞ヶ浦のサンセット』ですか!？」

司会 「はい♪」

調 「うっわ！」

漣音 「み、見て欲しいような、恥ずかしいような……」

優陽 「二人はあまり映ってないからいいじゃん！ あたしなんか、メツチャ

映ってるし」

漣音 「わたしだって、演出してるのよ!？」

調 「サウンドは私だ!」

司会 「それでは『霞ヶ浦のサンセット』ご覧下さい」

自分達の自信作ではあるものの、若気の至りを存分に発揮した作品であることもあり、戸惑う三人。

そんな三人を横目に、司会者は手を前に出し、再生をうながした。

◆草野家

泰介 「おい、待て!」

食べていた味噌汁を吹き出す泰介。

◆真島家

みちる

「いやーっ！」

拙い演技が恥ずかしくて頭を抱えるみちる。

◆奥井家

奥井

「あのヴァイス、ボクが作ったんだよね〜」

家族に自慢する奥井。

◆水戸 茨城シャード放送局

三人 「……………」

司会 「いやゝ、素晴らしいじゃないですかゝ」

時間の都合上、ダイジェストの上映となってしまったが、うまく編集されて面白さが十分に伝わる映像になっていた。

漣音 「ううう、恐縮です」

優陽 「うん！ やっぱり面白いよ、『霞ヶ浦のサンセット』！」

恥ずかしさのあまり恐縮する漣音だったが、改めて見なおした自分達の映画に優陽は胸を張った。

調 「だな。自信を持って大丈夫だよ、漣音」

漚音 「う、うん。そうだよね」

優陽 「こんな映画、一緒に作りませんか!? 筑波研究学園高校の映画研究

部で待ってます〜!」

結局、漚音が恐れていたプチカオス状態にはなってしまったが、初めてのテレビ出演は成功といって良いものだった。

◆筑波学園大学付属筑波研究学園高校 部室棟

テレビが放映された次の日の放課後。

三人は期待を膨らませながら、映研の部室で入部希望者を待っていた。

優陽 「来ないねー」漚音 「やっぱり退かれちゃったかな……」

調 「寮で録画した放送を客観的に見たら、やっぱり少し恥ずかしいものが

あったからな」

優陽

「ううん、大丈夫だよ！　きっと来るから！」

その時、構内放送が三人を呼び出した。

校内放送

「出勤要請のお知らせです。稲葉優陽さん、草野滯音さん、櫻井調さん。校内におりましたら、ブリーフィングルームへおこし下さい」

優陽

「あ、出番だ！」

もう少し待っていれば、誰か入部希望者が現れるかもしれない。

そんな期待もある中の出勤要請に、三人はほんの少しだけ複雑な想いだった。

優陽

「今はこっちが本業だよ！　今日も頑張ろう！」

調

「だな。せっかくだから、今日は映画のテーマ曲流しながら戦うか？」

滯音 「なるほど。うん、良いかもね」

優陽 「映画みたいに、ヴァイス、怯んだりして」

滯音 「ありかるかもよ」

優陽 「それじゃ、今日も頑張ろー！」

三人は同時に握った拳を天に突き上げると、勢いよく部室を飛び出していった。

／＼／ 筑波ルート・ハッピーエンド ／＼／

【アンケート】次の選択肢の中であてはまるのはどちらですか？

《A 選択されなかったルートの物語を読みたい》

《B 新作を読みたい》